防災教育　いわき市立久之浜第一小学校

キーワード：　～　自分の目で判断し、適切な行動がとれる防災力
（「自助力」、「共助力」）の育成を目指して　～

Ⅰ　研究について

1　本校について

久之浜は、いわき市の北端に位置し、古くから漁業で栄えた久之浜町と農業を中心としている大久村で構成された地域である。

久之浜第一小学校は、明治６年に創立し、今年で１４６年目を迎える歴史ある学校である。昭和３０年代には１３００名を超える児童が在籍していたが、現　在は１３０名と１０分の１以下に減少している。

2　震災当日やその後の状況

３月１１日の大震災では、久之浜地区は大地震、大津波、火災によって甚大な被害に見舞われた。７００戸の家屋が津波による流出や火災による焼失の被害に遭い、５０名の方の尊い命が奪われた。（関連死を含めると６９名）

学校においては、校庭への一時避難、そして大津波警報を受けて高台にある中学校への２次避難を行うなど、教職員の一丸となった避難誘導により、子供たちへの被害は防ぐことができた。施設面では、直接的な津波の被害はなかったが、地震による地割れや地盤沈下により、校舎は多大な被害を被った。

3　全体計画

学校防災教育目標を『～自分の目で判断し、適切な行動がとれる防災力（「自助力」、「共助力」）の育成を目指して～』とし、さらに、新学習指導要領で再整理された資質・能力の三つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」ごとに教育目標、重点目標、学年別重点目標とより具体的になるよう設定した。

また、目標に向かうための具体的な取組みを、「保幼中との連携」「地域との連携」「防災副読本等の活用」「教科・領域における指導内容」に分けて具体的に明記することにした。

（資料Ⅰ・参照）

4　年間計画

年間計画としては、全体計画にも明記した具体的な取組みを、さらに、学校行事、教科、生徒指導において、どの時期に何と関連付けて指導していくのかをカリキュラムマネジメントの視点から明確にすることで、見通しをもって計画的に指導していけるように作成した。

（資料Ⅱ・参照）

Ⅱ　研究の実際について（実践協力校としての２年目）

１　校内での実践

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一斉臨時休業やその後の新しい生活様式を踏まえた対応等により、当初の計画通りに行かないことが多かった。１学期はほとんど実践できず、大半を２学期の９・１０・１１月の３ヶ月で行うことになり、大変苦慮しながらの活動となった。特に、昨年度から実践を始めたこども園、保育所との合同避難訓練や地域の方々を多数お呼びしての発表会等は行うことができなかった。

実践１　全学年・保護者　引き渡し訓練＜６月２７日＞
非常時を想定した保護者への引き渡しを実施

校庭に集合

保護者への確実な引き渡し

実践２　第４学年　いわき震災伝承みらい館見学＜９月１５日＞

語り部さん（他地区）のお話に真剣に聞き入っていた

施設内見学

実践３　第４学年　講話「震災を経験して（日赤賛助奉仕団：佐藤先生）」＜９月２３日＞
語り部（地域の方）による震災の体験談の講話

資料を使って話をしてくださる佐藤先生

近所の方のお話ということで、みらい館での講話とはまた違った印象を感じていたようであった。

実践４　第４学年　コミュタン福島見学＜９月２５日＞

説明を受けながらの展示の見学

放射線の体験研修メニュー「霧箱で放射線の性質を確認しよう」

実践５　第４学年

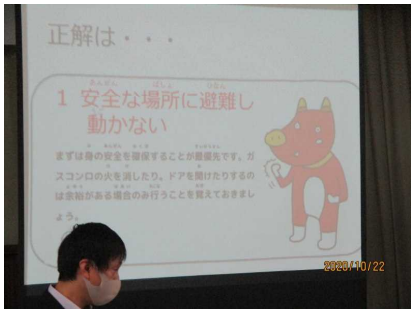
「いわき市地域防災交流センター久之浜・大久ふれあい館」見学＜９月２９日＞

施設内見学

震災に関するたくさんの資料

実践６　第４学年　そなえるふくしま防災出前講座＜１０月２２日＞

福島県の危機管理課による講座に申し込み実施



防災クイズ

防災 VR 体験

実践７　全学年　シェイクアウト訓練＜１１月５日＞

気象庁の緊急地震速報訓練を実施（音源はHPよりダウンロードして使用）

実践８　第４学年　＜１１月５日＞

昨年度のように青少年赤十字賛助奉仕団のみなさんの協力は仰げなかったが、日本赤十字社福島県支部の阿部さん、齋藤さんのご協力を得て、非常食体験並びに防災コミュニケーションワークショップを体験させることができた。

非常食作り体験（ハイゼックス炊飯）

防災コミュニケーションワークショップ（竹ひごタワー）

実践９　全学年　避難訓練（火災発生時の避難及び消火訓練）＜１１月２６日＞

火災を想定した避難訓練及び教職員による消火訓練

「おさない・かけない・しゃべらない・もどらない」を守っての避難完了

消火訓練　　誓いの言葉

2　まちづくりサポートチームとの活動

（1）　はじまり

「久之浜大久地区まちづくりサポートチーム」は、２０１２年、いわきや関東在住の建築家等の有志のメンバーで構成され、震災後に何かできることはないかと集まり、自治体のまちづくりに対して専門知識を生かしたサポートを行うようになったのが始まりとされています。

サポートチームは、「これから三十年後の久之浜を担っていくのは震災を経験した子供たちである。この子供たちに久之浜の良さを理解してもらい、一番のファンになってもらいたい。そして、自ら社会の問題に気付き提案できる人間になって欲しい。そうすれば、進学や就職で久之浜を一時的に離れても、久之浜に戻ってきてまちを盛り上げてくれる中心人物になってくれるかもしれない。」と久之浜の未来について考え、２０１３年からは、本校の教育活動もサポートしてくれるようになりました。

（2）　主な成果

・２０１３年

県いわき建設事務所主催の「防災緑地ワークショップ」における子供たちの提案が大人を動かし、幼稚園跡地の近くに小さな広場と東屋が設置されるようになった。この「防災緑地について考えよう」という特別授業は、2014年キッズデザイン賞・キッズデザイン協議会会長賞及び2015年グッドデザイン賞を受賞した。

・２０１６年

2015年からは、防災緑地に限定せずに産業も踏まえながら、地域と環境のことを考えた「未来のまちづくり」にシフトした。このまちづくりの学習は国土交通省が後援する2016年都市景観大賞・教育部門の優秀賞を受賞した。

・２０１９年

歴史や文化の解説を交えながら、楽しく久之浜を再体験できるような「ミステリーツアー」と題したフィールドトリップを企画していただくのをきっかけに、関係機関等に出向いてインタビューをするなどして久之浜の未来について考え、様々な形でまとめた。福島民報主催「小中学生まちづくり大賞」にて、アイデア部門銀賞２点、銅賞２点受賞した。

このように、サポートチームの皆様は、結成当初の思いを維持しながら、時代の変化に合わせて少しずつ内容の改善を重ね、今日までサポートを続けてきてくださいました。

3　公開授業研究会での実践等

（1）　第４学年　総合的な学習の時間「これからの久之浜を考えよう」の実際

第 4 学年　総合的な学習の時間:「これからの久之浜を考えよう(地域と防災)」

令和２年 11 月 18 日（水）5 校時
場所：体育館　指導者：根本広子

1　ねらい

○　これまで学習してきたことを、グループごとに発表し合うことを通して防災への意識を高める。

2　指導計画（46 時間　34 ／ 46）

（1）　オリエンテーション　（　１時間）
（2）　活動計画を立てよう　（　３時間）
（3）　災害について学習しよう　（１０時間）
（4）　町へ調査へ出かけよう　（　６時間）
（5）　関連施設の見学をしよう　（　６時間）
（6）　これまでの学習をまとめよう＜本時＞ 8/10　（１０時間）
（7）　安全な町作りについて考えよう　（　５時間）
（8）　私たちの考えを広く知らせよう　（　５時間）

3　展開

学習活動　　◇主な発問	時間	教職員の支援等【資料】
①　これまで学習してきたことの確認をする。 ◇　今までにどんな災害について学習してきましたか。 ・火事、台風、地震、津波、水害、土砂崩れ、火山、大雪、非常時の持ち出し品の準備など	5	○　これまで学習してきた資料を示す。 ・避難訓練 ・引き渡し訓練 ・防災緑地見学 ・久之浜・大久ふれあい館見学 ・佐藤トミ子さん震災語り部 ・いわき震災伝承みらい館見学 ・コミュタン福島見学 ・シェイクアウト訓練 ・ＢＣW竹ひごタワー作り ・ハイゼックス米炊飯体験 ・各災害について学習したこと ・日本赤十字社の資料
②　グループごとに発表する。 ◇　学習したことをグループごとにまとめてきました。今日は、発表を聞いて「よかった点」「付け足した方がよい点」「直した方がよい点」を考えながら見たり聞いたりしましょう。その時に１番考えることは、発表内容が「災害から命を守ること」につながっているかということです。 　そして、学校や家の人たち、地域のみんなにも分かりやすく伝えるためにはどうすればよいかを考えましょう。 ・　４つのグループが発表する。	３０	○　グループごとに発表をする。 ①紙芝居（津波からの復興に向けて） ②ペープサート（放射線から身を守る） ③防災学習から学んだこと

		④防災クイズ（クイズと防災マップ）
③　発表を見たり聞いたりした感想をワークシートに書く。 ◇　自分の感想を書き、今日の発表で良かった点やもっとみんなに分かりやすく伝えるために工夫した方がよい点を発表してください。 ・　いつ避難した方がよいかを書いたほうがよい。 ・　一人でも避難所に逃げた方がよいことも書いてはどうか。 ・　声が小さい人がいるので大きな声ではっきり話したほうがよい。 ・　ポイントになる部分には、色をつけたほうが分かりやすい。　など。	8	○　発表内容が､「災害から命を守ること」につながっているかを考えて、感想を書いたり発表したりすることを伝える。 ○　ワークシートに自分たちが発表したり聞いたりした感想を書き、「災害から命を守る」ことにつながっているかを話し合う。【ワークシート・発表】
④　これからの学習予定を話す。 ◇　今日話し合ったことを基に、発表内容を付け足したり、分かりにくい表現は直したりしてから、まず、３年生にわたしたちの考えを伝えましょう。	2	○　今日の反省をもとに、次は３年生に発表することを伝え、次時への意欲をもたせる。

4　評価

○　これまで学習してきたことを基に、グループごとに発表し合うことを通して防災への意識を高めることができたか。（ワークシート、発表）

5　その他

○　東日本大震災を振り返る場合には、児童の実態に配慮する。

6　参考文献

・そなえるふくしまノート（福島県）　・まもるいのち　ひろめるぼうさい（日本赤十字社）
・ふくしま放射線教育・防災教育指導資料（活用版）（福島県教育委員会）
・ふくしま放射線教育・防災実践事例集（福島県教育委員会）・放射線副読本（文部科学省）

（２） 第５学年　総合的な学習の時間「久之浜の未来を考えよう（地域と環境）の実際

第6学年 総合的な学習の時間:「久之浜の未来を考えよう(地域と環境)」

令和２年 11 月 18 日（水） 5 校時
場所：自教室　担任：大久保直輝
指導講師：久之浜・大久まちづくりサポートチーム

1　ねらい

○　自ら課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。
○　学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て自己の生き方を考えることができるようにする。

2　指導計画（52 時間）

○　オリエンテーション　（　１時間）
（１）　久之浜の今を知ろう　（　６時間）
・　防災緑地への取組みを調べよう
（２）　防災緑地と関わりを深めよう　（　８時間）
・　県・市建築関係者との連携
（３）　防災緑地の活用の仕方を考えよう　（　５時間）
（４）　自分たちが住みたいまちを考えよう＜本時＞　（２３時間）
※　久之浜・大久まちづくりサポートチームによる協力
（５）　自分たちが考えたまちを発表しよう　（　９時間）

3　全体的な学習の流れ

1	①　指導計画におけるオリエンテーション～（３）までの学習は、担任のみの指導によって進められる。 ②　こうした現地視察等を通して、児童自らに課題を見つけさせ、学びそのものに主体性をもたせるようにする。
2 本時	①　全体のテーマを自分たちで考えた言葉にする。 今年度は**「未来のまちづくり～もっと、安心・安全な町にしたい～」** ②　「（４）自分たちが住みたいまちを考えよう」の学習から、「久之浜・大久まちづくりサポートチーム」の方々が、７～８日の期間に２時間ずつ、約１５時間程度授業に入り、児童をサポート。 ③　サポートチームのメンバーは、５～６名来校し、ファシリテーターとして一人一グループを担当。 ※　サポートチームのメンバーに首都圏在住の方が多いため、今年度は、リモートを活用。

	④　サポート後に、地元で製造業を営み共同代表者である遠藤氏から提出されたレポート（別紙参照）を基に、担任が打ち合わせを行い、次時までの学習を進める。 ⑤　発表に向けてのまとめ作業を担任が指導。 ※　昨年度は、PC を使用したり、模造紙にまとめたり、絵本を作ったりした。
3	①　児童自ら、久之浜・大久地区の「青少年育成意見発表会」にて、概要を説明し、これまでの取組みをアピール。 ②　在校生及び地域の方々を招待し、広く取組みを伝える。

（３）　研究概要報告及び講演会の様子

演題「震災当時の取り組みとこれから」
講師　錦公民館長　（元久之浜第一小学校長）　松本　光司

＜参観者の感想＞
　避難経路の話が非常に印象的であった。これまで使用していた高台までの最短距離の経路を使用せず、新たな経路を開拓したのは、徹底して危険性を排除した結果であるとのことであった。（最短の経路は橋を渡らざるを得ないため）また、ヘルメットをしっかりと着用させるため、子供たちが、少しでも付けたいと思うようなデザインのものを選んだなど、命を守るという意識の高さに脱帽した。

Ⅲ　成果と課題について

1　成果

○　児童のみならず、教職員の防災意識の向上も自然と図られたように感じる。教職員に十分な専門性がない状態でのスタートであったが、関連機関や地域の施設、地域の方々、県発行の様々な資料等を活用することを通して、子供たちと共に防災の大切さを学ぶことができた。また、これまで教育課程に位置付けてきた取り組みを実行することだけでも、十分に防災教育が進められるということも実感することができた。

○　コロナ禍であっても、昨年同様、地域の「青少年赤十字賛助奉仕団」の方の震災講話、防災施設としての「久之浜ふれあい館」の見学など地域素材を活用することで「地域と共に創る防災教育」を展開することができた。

○　防災教育の取組みが、一部の学年に集中していることは否めないが、その学習の成果を全校児童の前で発表することができた。それにより、防災に関する知識・技能をはじめ、子供なりの防災への思いや願いを全校生で共有することができたのは、本事業の大きな成果である。

2　課題

●　今年度力を入れ取り組む予定であった「家庭や地域と共に創る～」の部分で、コロナの影響により、大勢の参観者や協力者が集められずに、十分に行うことができなかった取組みがいくつもあった。

●　教育計画の位置付け上、防災教育に関わる大きな取組みが総合的な学習の時間における一部の学年に集中しているため、教員間での関わりに差が生じてしまった。

3　課題解決に向けて・・・

◇　教職員間の連携の強化や、関係機関との連携のマニュアル化を通して、しっかりとこれまでの取組みを引き継ぎ、全ての児童に「自分の目で判断し、適切な行動がとれる防災力」を身につけさせることができるよう進めていく。